

住民自治について考えるフォーラム（平成 20 年度） 知事講演

○日 時 平成 21 年 1 月 14 日（水）午後 1 時 40 分～午後 2 時 10 分（30 分）

○場 所 倉吉未来中心セミナールーム 3

○テーマ 「協働による地域づくり」

○内 容

【はじめに】

今私たちは、地域から私たち全体を変えていく、私たちの自身のまちづくりだとか教育だとか福祉だとか、あるいは地域の形、公共投資なども含めて、色々な所に町のエネルギー、息吹、心を入れていくという作業が大切だと考えますし、そういう時代に入ってきたのだと思います。

日本というのは本来いい気風がありまして、地域で助け合うということが守られてきました。考えてみれば江戸時代の五人組だとか、村ごとにいろんな仕事をしたりする「総事」がありました。さらに遡ると、狩猟採取の生活から太古の昔農耕を始めた弥生の昔、いつの時代も一つの村なり集落なりが生活であり経済の基盤であったわけです。しかし戦後急速な経済成長が高まってくる中で、あちらもこちらもだんだんと合理的なものの考え方が進んできたわけです。それであつという間に地域の自治組織だとかコミュニティというのが、何か空々しい、そういう存在になってしまいかけたというのが、戦後の半世紀だと思います。

【既存システムの崩壊と自治会の再評価】

これからどうなるのかという不安もあります。その背景になっているのが、世界中で私たちが見ていたシステムが壊れてきているということだと思います。経済成長なり地域の発展を支えてきた原動力は、欧米型のやり方でした。特にレーガンだとか、サッチャーがアメリカイギリスで誕生した頃から、その仕組みも更に、合理主義的、ドライなものに変わってきたと思います。

新自由主義という言葉がありますけど、これは社会民主主義のような言葉のアンチテーゼみたいに使われはじめた言葉であります。要はほったらかしてもいいという、放任して経済のことは会社だとか市場に任せればいいのかという、そうしたら市場が何となく解決してくれるという言葉です。福祉、医療などいろんなシステムが本来あるが、それらは需要と供給がマッチしたところで価格が決まるというマーケットメカニズムの中で、すべてが合理的な配分になって無駄が省かれている。余計な介入をすることが、かえって世の中の無駄、歪みを生むのという考え方でした。

しかし去年 1 年間の激動を振り返って見ると不思議なことが多いと思います。ちょうど去年の今頃、新聞やテレビで大騒ぎし、私たちもすっかり巻き込まれたのは、どんどんと灯油代が上がって、こんな寒い冬なのに灯油を買おうと思ったら高いことがありました。今ずいぶん下がっていますので忘れかけていますが、そういうことがありました。また石油は上がり、原材料は上がり、おかげで農家の皆さんも肥料代は上がると大変な痛手でした。畜産農家もどうしたものだろうかということがありました。

しかし急にバブルが崩壊して住宅のバブルが壊れて、そのうちに原油高も落ちて、1 バレル 50 ドルまで下

がるという考えられない乱高下です。正月休みに、金子勝先生という慶応大学の先生と話したら、なるほどと思いました。今まで私たちは経済学の教科書にあることをいろいろ考えていたのだと思います。経済学の教科書の中で、先ほど申し上げたマーケットメカニズム、市場経済でいろんなことが決まってくる、予定調和ですよ。世の中のもの消費だとか、政府が支出するものだとか、投資だとかこういうものの組み合わせで、全体の経済が決まってくるのですよという説明で、皆さんも覚えておられると思います。私も思い出すわけですが、学校でさんざん教わったことというのは、需要が上がってくると価格が上がってきて、今度は需要が下がれば価格も下がる需要と供給のバランスが動くという。確かに今変でそういう風になってない。投資家が余分なお金を持って、それが世界中を動き回るようになりました。何が変わったかということ、金本位制、プラザ合意が壊れてきた。為替、金融が自由化されて、証券と銀行に境目がなくなってきて、お金の投資をしてお金を儲ければいいということになってきた。今は需要が上がってくると投資家の皆さんが参加をしてきて価格が上がってくる。需要が上がれば上がるほど価格が上がって天井知らずになる。ある時急に下がるのという話になります。下がり始めて今度は、際限なく下がり始める。こういうように需要と供給のバランスで価格が決まるというシステムという経済学の教えから外れてきて、教科書通り行かなくなってきた。パチンコ屋とかカジノと一緒に、要はたくさん投資して急に儲かったと思うと、急に損したということになった。

それに右往左往されるのが、地域であり、一人一人の国民であることになってきている。世界の中の一握りの人たちがお金儲けをしているということになっていないか、こういうようなシステムに対する反省が生まれてきているわけです。

これに変わる別の新しい社会の仕組みというものを作らないといけないのではないか。もう一度よく考えてみましょう。例えば経済のことでいえば、ものづくりだとか、実際のサービス提供とか、そういう基本に立ち返って組み替えていかなければならないと思います。また地域のことは、古き良き日本の伝統なりをもう一度考え直してみる必要があるのかな、その意味で自治会が果たす役割がこれから再評価されてきて、自治会だけでなく、地域のいろんなまちづくりの細胞が動き回って、そういう世界が生まれなければならない。これが時代の必然だと思います。

【将来ビジョンについて】

昨年の末までに、東部、中部、西部でタウンミーティングを2回ずつやり、議会の意見や市町村の意見、様々な団体、住民の皆さんのまちづくりの意見を伺い、将来ビジョンを12月26日にまとめました。皆さんから寄せられる意見は最大公約数が見えてきました。だいたい同じような考えだと思いました。それでまとめたのが、「みんなでつくる活力安心鳥取県」というテーマです。これで向こう10年くらい進めていこうということです。

国の今年のテーマも「安心活力」だそうございまして、安心というのセーフティネットを張らないといけない、活力を出して今のどん底にむきかけているものを反転させないといけないという世相なのだと思います。

今世の中にそれほどお金があつたりするわけではありませんので、住民パワーで元気出してやっていこうじゃないかと、金がないことは分かっていますから、行政を頼るということではなくて、自分たちも元気を出してやっていこうと、それを支えてもらいたいという御意見も非常に多かったです。またそれと併せて自分たちでやるにしても、そのためのノウハウがないとか、研修の場がないとか、人材づくり、人を育てることと、60万という小さな県ですから、是非やってもらいたい。そういう意味で「人財とっとり」というものを推進したらいいのではないかと思います。

「人財」というのは、人が財産と書くわけでありまして、人が財産と書いて「人財とっとり」というのをこれからやっていこうと、これもテーマの中で書かせていただいたところです。鳥取が大都市と違って活かせる強みはないだろうか。これもだいぶん議論しました。その時にいいデータが出てきました。国の方の総務省が調べたデータで、ボランティア参加率、全国で調査をしました。ボランティア活動に1年を通じて参加した人の割合はどのくらいですか、という調査ですが、34.5%の人がボランティア活動に鳥取では参加をしていた。我々がその数字だけ聞くと、ゴミ拾いにも行ったし、子供達の子供会活動の支援とかお手伝いをしたし、ボランティア活動にも思い当たるところがあるわけです。これは全国1位でした。全国で2番目グループは隣の島根県、近畿の滋賀県、滋賀が高いというのは琵琶湖の環境推進活動を盛んにやっていることから数字が出るのだと思います。

【住民自治組織と人のネットワーク】

島根と鳥取は山陰であります。おそらくコミュニティ、自治会を中心としたコミュニティ組織というのが、今でもしっかりと保たれていて、これが全国の他の地域と差別化できてきている、違った魅力になってきているのだと思います。こうした人が作っていく、我々の小さな組織だけど、我々の小さな組織から地域を元気にしていく、という力が発揮できれば、東京だって大阪にだって負けちゃいないと、我々だってそれと伍して対等に戦っていける、それだけの力の原動力になるかもしれない。顔が見えるネットワークってことを我々考えられるのではないかと。今日もこうして拝見させて頂くと自治会の指導的役割を担っておられる方々ばかりで、その他の所でもお会いした方が結構おられます。我々のコミュニティは、学者さんとか企業家だとか、市民活動しているお医者さんとか、学校の先生、いろんな人たちがお互いに顔が見えて、あのことだったらあの人に頼んでみようやという対応が出来る世界、同じことを東京とか大阪でやろうとしてもやっぱり無理だと思います。これがしっかり出来れば、つまり地域の組織が活性化できて、それで我々なりのまちづくりのシステムを作り上げることが出来れば、新自由主義経済ですっかり壊れた世界中の停滞感の中で、鳥取県は元気を出すことが出来るかもしれない。これは地域おこしだけでなく、産業だとか子供達の教育だとか、あるいは福祉や健康づくりだとかいろんな分野に応用が利く話です。ですから、顔が見えるネットワークづくりというのが我々の新しいテーマを導くその原動力になるのではないかと思います。大きいところだけが、しっかりしているわけではないなと思うことがあります。個性を発揮しながら、マスの中で、大衆の中でやっていくというのが東京の世界でしょう。しかし我々の所は、小さなコミュニティの中でやっていますから、むしろその中に、産学官金連携だとか、地域づくりの山が生まれやすいという特性があるように思います。これを活かしていけるかどうか、これからの地域を開く

分かれ道ではないかと思えます。

【鳥取県の状況】

鳥取県は面白いことがいっぱいあります。例えば、食のみやこという、昨年アンテナショップも作り、結構繁盛しています。もちろん色々と看板とか改善しないといけない点がございませうけれど、そういうようなことをやっていると、いかに鳥取というのが、環境がきれいで食べ物がおいしそうかというイメージができていくのかというのがわかります。生鮮品なんかよく売れます。カニを出した月だとか、梨を出した月だとか売り上げが上がります。そうした意味で鳥取は魅力がある。あるいは環境もそうですね。鳥取砂丘条例というのを去年9月に出しました。これは住民の皆さんと一緒に砂丘を保全するという条例であります。併せて落書きを禁止する罰則のことです。いふん騒ぎになりました。ただあの時も、議論が議会で出された最中に、ヤフーという全国のインターネットの組織がございまして、ヤフーが勝手にアンケートをやりました。鳥取県砂丘条例に賛成か反対かというアンケートをやって、罰則も含めて4分の3の人が賛成した。罰則が重すぎるとというのが4分の1くらいありまして、半分くらい罰則は、最初我々が提案したままでもいいくらいの話でありました。だいぶ時代が変わってきました。落書きも含めて環境をととても大切にするとところというのは評価されるようになった。それは当たり前だという世の中になってきている。この意味でも鳥取はアドバンテージがあります。更に今度は高速道路が開通しようとしています。昨日も国交省に行きましたけれど、まあ間違いなく来年度いっぱい鳥取自動車道は完成すると思えます。こちらの北条湯原道路も少しずつ延ばしていこうということの方向性は保たれるようにやっていきたいと思えます。山陰自動車道も昨日も訴えて参りました。いずれにしても大交流時代が始まろうとしています。来月になれば試験運航からかもしれません。海の向こうとの航路も韓国、ロシアと始まるかもしれない。そうしますと今までとは違った局面が開かれるだと思えます。明日は大阪に行きますが、大阪で淀屋のことを材料にして話し合いをしようと、橋下大阪府知事が私のパートナーとして公開対談をする。ファミリーというマッサージ企業がありますけど、稲田さんと3人で、堺屋太一さんの基調講演とか色々します。淀屋が家を再興される際に元気を出して倉吉の方でやって頂いたわけでありませう。こうしたご縁も微かにあるわけございませう。ですからもう一度関西とのご縁を復活させて、やっていくことになる。いずれにせよこれから活性化できるかどうか、チャレンジが目の前に広がってきている。

【市町村の取組事例】

住民自治組織なり地域の組織で、いろいろうまくいっている例は多いわけでありませう。ただすべての地域がうまくいっているわけではない。ただ成功例はいろいろ出てきています。今日もこれから表彰を受けられる皆さんにお祝い申し上げたいと思えますし、上北条であればお祭りをやったり森をやったりそういったことを山本会長さんの元で皆様がやっておられる。ある町内会では防災を非常に頑張ってみたり、お医者さんが活躍されたり、トリアージュの芝居をやったり、鳥取市湖山の自治会方で、昔、城があったとことをもう一度検証してみようではないかと、地域の隠れた資源を活用しようという取組を積極的にやっておられます。それが更にビジネスへと発展していくところも生まれてきています。智頭の新田はNPO法

人を最初に地域づくりを立ち上げた一つでありますし、そこで元々は大阪の生協さんと交流をされていて、それから更に始めて最近では移住者もおられる。そうした意味では、鹿野の「いんしゅう鹿野まちづくり協議会」も頑張っておられます。これも元々はお祭りに合うまちづくりから始まった。旧鹿野町のまちづくりに住民が参画するあたりから話が段々と組織化されてきました。たしかに行ってみると非常に瀟洒な町並みでございます。みんなでレストランをやって経営をして、これも菅笠が名物だということで菅笠の中に弁当を入れてある。これが商売として確かにみんなで努力している。汗かいて損したのか得したのか分からないというのは、実情かもしれませんが、今までなかったものが生まれると、人が集まってくる自体は事実だと思います。ここ倉吉も白壁土蔵群、最初はずいぶんと苦戦していたと思います。出資をして会社をつくって滋賀の黒壁と同じようにやろうじゃないかと始めてやっていったわけです。最近本当に歩く人も増えてきましたし、遠くからの観光客も多くやってくるようになってきました。先般ですね、やっぱり中部で東郷池の周りの人のお話を聞きました。羽合側の旅館が持っている船を松崎の方につけるようにした。本当は燕趙園の方にも寄っていったんですけど、燕趙園にみんな人が行きすぎるということでコース変更をされたそうです。それで松崎の方に船が行くようになりました。何が起こったかと言いますと、みなさん多分想像できないと思います。温泉で遊んでいたお客さんが昼間行き先を求めて歩き回ります。それで燕趙園までの道すがらということもあるのでしょうか松崎の駅の古い商店街を歩くようになった。それで観光客が流れていく流れが変わってきて、この観光客を相手に商売が出来るかもしれない。お客さん相手にこんなことやってみるかとか声が生まれ始めている。こういうようにいろいろ噛み合ってきている。その究極の例は境港の鬼太郎ロード、最初は市役所がふるさと創生の時期でありますから、お金も多少あってブロンズ像でも作ろうかと妖怪のブロンズ像を建てようといったら、そんな辛気くさいものやめてくれと、最初はそうだったそうであります。それや今や蓋を開けてみると172万人の人が年間やってくる。とんでもないことになっているわけですね。これは別に市役所がやっているわけではない。商店街の方とかみんなが面白がって、最近妖怪のブロンズまで作って盛り上がっているわけです。こういうように面白く楽しくみんなで元気を出してワイワイやるという地域づくりが、これから本当のスタイルだと思います。これがうまくいくかどうかでその地域の成否を分けるようになってきている。

【住民自治組織の新しい取組】

自治会活動は、もともとは江戸時代以来の地域の組織から端を発しているのだと思います。ただ今、次の時期に入ろうとしているなと思います。例えば三朝町だとか、南部町だとかそうしたところでは、学区単位くらいでスーパー町内会をつくるようになってきています。いわば行政権限の一部を地域でもやるようになってきている。それは市町村の単位が大きくなって合併して変わってきたこともあります。あるいは倉吉とか境港市とかいろんなところでも動きが始まっていますし、鳥取でも、まちづくりの住民自治基本条例というのをやるということも今や定番化しつつあります。今このような経済の停滞感の中で、町内会活動みたいな地域活動がなければ地域が伸びていかない。更に入れ物である市町村が変わってきている。いろんなことが副作用としてあって町内会活動、自治会活動が新しいステージに入りつつあるのではないかと思います。

【さいごに】

結局私たちが住むところはそれぞれの町内です。村の中です。ですからそこで、安心して暮らせる素地というものをみんなの力で作っていくことではないかと思います。このたび策定した将来ビジョンの中でも、「支え合い、つなげる」ということをキーワードとして選ばせて頂いたところです。

私が好きな尾崎放哉の歌にこんな歌があります。「お祭り赤ん坊寝ている」。お祭りの賑わいの中、町の賑わいの中、みんながそれぞれに力を出し合っている、そのような町の中で、安らかな小さな人生が旅立ちの時を安穩として過ごしている情景であります。

是非みなさま、自治会連合会の皆様、それぞれ自治会の皆様に鳥取県を良い方向へ導いて頂きたいと思っております。これからの鳥取県の安心と活力の源として更なるご活躍をいただきますようお願いを申し上げます。残念ながら全県的に自治会連合会の組織が発達しているわけではございません、みなさまそのための呼びかけなり、組織化を進めて頂ければと思います。この1年のご健勝ご活躍をお祈り申し上げます。私の方からの話に変えさせていただきたいと思っております。本当に今日はありがとうございました。